

神高 S S H 通信

ISEF サイエンスリポーター派遣 特集

ISEF 派遣に関して

2009 年 12 月に開催された「第七回ジャパン・サイエンス&エンジニアリング・チャレンジ」最終審査会において、3 年 8 組の大脇 遼君、諸澤正樹君、渡邊信吾君の 3 名が朝日新聞社賞を受賞しました。そして、副賞として 2010 年 5 月 9 日よりアメリカのサンノゼにて開催された Intel®ISEF (インターナショナル・サイエンス&エンジニアリング・フェア) にサイエンスリポーターとして派遣されました。今回はこの 3 人に依頼した記事を掲載します。3 人にはお忙しい中、原稿を書いてもらいました。ありがとうございました。では、是非ご覧ください。

★Intel®ISEF

参考 URL⇒<http://www.isef.jp/>

★ジャパン・サイエンス&エンジニアリング・チャレンジ

参考 URL⇒http://www.asahi.com/ad/clients/09jsec/2009/isef2010/isef2010_04.html



サイエンスリポーターたちの声

大脇 遼

アメリカは、やはり科学の国だと思った。今回の ISEF で一番思ったのは、そのことだ。ISEF というのは、Intel が主催する高校生の科学コンテストのことであり、アメリカ軍を始め、google などのいろんな企業や団体が研究をしている高校生を応援するため、それぞれがいろんな賞を出している。その中でも、一番上位の賞に当たる Gorden E.Moore 賞では、750 万円もの奨学金が与えられる。また、会場も金融危機により例年よりは劣っていると言われていたが、それでもやはりすごい熱気に満ち溢れていた。見ているだけで、なにもできなかったのが、ひどくもどかしかった。

また、アメリカで苦労した点は何といても英語である。

ISEF での取材においてもすべてにおいて英語で行わねばならず、初めは出来るとは思えなかった。しかし、プレゼンターの人は皆、僕の Broken English でもしっかり聞いて受け答えてくれた。とてもフレンドリーで、僕たちの行った研究に興味を抱いてどんなことをしたか逆に聞いてきた中国人のプレゼンターの人もいた。うれしい反面、英語で研究の内容を伝えるのはとても骨が折れることではあった。他にもさまざまなことがあったが、僕の英語が多少つたなくても、はっきりと言いたいことがあれば真剣に聞いてくれる ISEF の人々の態度には感動させられた。

最後に今回の ISEF 日本代表に対して、あるノーベル化学賞受賞者が贈られた言葉を紹介したい。

『The difficult we do immediately, The impossible takes a little longer.』



諸澤 正樹



一週間のアメリカでのツアーは、あっという間に終わった。しかしこの一週間で本当に多くのことを学ぶことができた。とくに印象的だったのは、ISEF（国際学生科学・技術フェア）のサイエンスリポーターとしての取材だ。私は環境管理というカテゴリーを担当した。その中で“Alkaline Rainfall(アルカリ性降雨)”というタイトルの研究を見たとき、とても興味を持った。それは、酸性雨というのは環境問題として注目を集めているが、アルカリ性降雨というのは初めて耳にする言葉だったからだ。この研究が実施されたのはアルゼンチン中部の高校で、彼らは酸性雨について調査しようと試み、雨水のpHを測定したところpHの値が7以上という結果が得られた。この結果は、アルカリ性を示すものだった。この経験は意外なものであり、驚きを覚えこの研究に取り組んだという。この研究のリポーターを務めて、彼らが思いがけないことからアルカリ性の降雨に着目したように、ごく身近な所に科学が存在しているのだということを実感でき、科学に対してさらに興味が増した。また、ISEFという場を通して、学生の科学者たちとも交流を深めることができた。

アメリカで過ごした一週間は、夢のような日々だった。そしてこの一週間では、様々なことを学ぶことができ、とても貴重な経験ができた。この経験は今後の人生で生かされ、一生の宝になると思う。

渡邊 信吾

約1年前、神戸高校生は新型インフルエンザに振り回され、そのとき始めた感染症の研究が評価を頂き私たちはアメリカへ派遣されました。今回参加したのは Intel ISEF という世界最大級の高校生科学コンテストで、私たち12人のサイエンスリポーターは2人1組で研究を取材します。

私たち2人が注目した研究は、ルービックキューブを解くロボットの製作です。彼ら2人の一方がロボットを作り、もう一方がアルゴリズムを考案するという各々の得意分野を生かした研究で、内容はもちろんポスターや発表も参考になりました。

今までは街中の外国人さえ珍しく思っていた自分にとって、世界中から高校生が集まるこの大会は想像以上に刺激的でした。言語の壁を越えて懸命に伝えようとする姿勢や研究への情熱は圧倒的で、今も鮮明に覚えています。自分の英語力の無さや科学に関する知識の乏しさを思い知らされ、様々なことを学ぶ意欲も増しました。

取材や企業・スタンフォード大学の見学以外にも、他校のリポーターや日本代表との交流の全てが一生忘れられない経験です。些細なことでも“Sorry.” “Thank you.” “You’re welcome.”と言うアメリカ人のさりげない気遣いによって「アメリカ人は個人主義だから冷たそう」という思い込みは破られ、実際に自分で感じることの重要性も知りました。この機会に将来の進路を考えるつもりでしたが、興味深いことが多く、ますます決まらなくなりました。今後も様々な経験を通して、焦らず、じっくりと考えていきたいと思います。

